

木々を緑にする力が

伊武トーマ

木々を緑にする力が
木々を枯らす
育む力がいつか私を
土にかえす
移りゆくものたちの
痛みが風をよび
去りゆくものたちの
悲しみが雨をよび
風は種を蒔き
雨は種を芽吹かせ
土にかえっても私は
あらたないのち育む
木々を
緑に燃え上がらせ

そよ風

神泉 薫

ニソフの羽衣を模した
うずまく
そよ風
その中心に開いた
万象の目をのぞき込む
わたくしの
まなざし
とおいい日
神に計られた風を受胎
噴出する息の谷を越えて
小さな光とともに生まれてきた
若やく夏草をなで
少女のスカートを
やさしく翻すために
人に
大地に
鳥たちに触れ
まぶしい季節を運ぶ
その柔らかな使命を果たした
うずまく
そよ風は
芽生えを身ごもる白い綿毛を
一度きり揺らし
消えた

家

坂多瑩子

あなたは
ドールハウスを作るからと
金や銀の折り紙や
マッチの箱や
あれやこれやら
あたしのところから持ちだして
細かいことばかりいつていたけど
やっごいぞ
どうぞ
つていわれて
玄関とびらをあける
へやからへや
廊下の先に
硝子戸があり
いろりがみえる
その先は行き止まりで
廊下をもどると
玄関ではなく
仏間で
葬儀がおこなわれていた
壁のシミみたいな写真のまゝに
あんなもすわっていて
神妙な顔をしているので
誰のつてきたら
あたしの親だという
それからあたしもすわっていて
あんなのとなりすわっていて
ドールハウスに
朝日が射す
おはようございます
おとうさん



トウキョウ・カンジョウの
誰そ彼
かわたれ時

トウキョウ・カンジョウ

森山 恵

一羽のムクドリが空を渡り
見上げる
トウキョウ環状通りの黄昏れ時
あの人が探したものは
見つかったろうか
三十年の異国暮らしの果て
馴染んだデスクや黒革張りのソファ
暗闇でもすぐに探り当てた壁のスイッチ
すべて
指先から毀れ
最後に触られた記憶を
扉ノブに残して
去っていく。死に至る病を得て
もう戻らないと知っている
窓からの風景には
指で触れることもなく、ただ
見つめるだけ
「人生は一度きり」
そう言つて わたしを抱き締め
離れていく。あの人が最後に残したものを
見つけられるだろうか
「ユダヤ人の血が入っているつて
知らなかったんだ、ぼくは」
触れられた記憶だけを残して
飛行機は空へ 遠く吸い寄せられ
泣く
ムクドリ
一羽が今日もしきりに
羽ばたいて
トウキョウ・カンジョウの
誰そ彼
かわたれ時

とかがけの葡萄のように満を持してひび割れた壁の唇……

たなかあきみつ

とかがけの葡萄のように満を持してひび割れた壁の唇
メンヒルの昔地肌を眼球のとかがけのように幻視せよ
普段使いの蒸し器の真鍮底の地肌とて、ところどころ
錆模様を呈す、褐色にも濃淡がありまたらかな臭く
(遅ればせながらとめの一発のような気がして)
タテジマの真夏のとかがけが植え込みからあたりを窺う
摩滅も摩滅も麻痺も麻痺もそれぞれ地肌にかかわる
突起も顆粒も粟肌もターマトグラフも地肌に着地する
砂塵も砂塵も砂塵も砂塵も粉々の dusts and dices である
ばかりか粉塵の外翻オベレーションだ砂の粒だちで粉糺
すればこれらは砂丘の風紋の外周へみるみる飛散する
多声の軋しぐれは七月末にはきまつて休廊する画廊の
壁面で滞留する、《時間のカーテン》の揺曳から手を
ひけ、今にも動き出しそうな泥だらけのニンジン三態
画家F Bのくるぶし付近に蟻集する豹柄の毛細血管の
群れ、裏返しにのたうち蚯蚓腫れたる、きりとして
画家L Fのくるぶしで見返すや moon walking
その周りでひしめく蛙身ピンクの流砂

人肌のボカリスエット

平井達也

人肌のボカリスエットだけれど
ひと口含むと癒される渴きもある
水気のない他には他にはないので
雨乞いするみたいに髪を剃る
鏡は乾き切りながらも
潤いをも正確に写す
セラビストの沈黙のように
手練れのベイスストのアドリブのように
冷やしておけばよかつたものばかりだ
粘土代わりのパンで作られたアーさん
発酵が不十分なまま飲んでしまった密造酒
母の目に贈らなかつた縁起物の花の種
固まつて流れるのをやめた砂時計
すぐには飲むつもりがなくて
またボカリスエットを買ってしまった
きつと冷やしておくのを忘れて
飲んでも潤すべきところに届かない

前夜の天気予報より三時間遅れて降り出した雨空の
オアセクションと思いきやロスタイムの左手のレント、
ラヴェル残響にて密室恐怖の空間に風穴をあける
光線が擦りきれんばかりの音場のピカタン伝説、
おおサムソン・フランソワのピアノの激流よ、
《アニメの忘却》だから反響する影に本体の可流矢
キーファアの真夏のタール本のエッジを鋭意録取るのは
とけだすハイジーンズの真紅のハイビスカス茶か
それとも愛玩犬のじれ声に似た若手揃いの
ペゴニアかそれとも手入れの行き届かぬ庭の雑草か
密生する季節外れのつじや風倒木に紛れて眼球の
とかがけとともにアノニムを貫く雑草のそよぎすら青空

とかがけの尻尾のようにスパッと断裂しそうなアキレス腱
に留意しつつたとえば箱庭もどきのセラビーの罫を
おまえのくるぶしに蝶番に格上げする、アキレス腱の
腐蝕をセラビーの箱庭に差し向けよとかがけの目蓋の閉閉
ノイズの浮氷であれじりじり真夏の視界を遮るか円盤の
求心性を増す顔のデッサンに対する線影の仕掛けは早い
【補註】《時間のカーテン》の揺曳から手をひけブルーノ・シュルツ
の『砂時計の下のサトリウム』からの引用句をパラフレー
ズした。
画家F Bロイギリスの画家フランシス・ペイコン（一九〇九
年ダブリン生まれ―一九九二年マドリッドで病没。
画家L Fロイギリスの画家ルシアン・フロイド（一九二二
年ロンドン生まれ―二〇一二年病没。ルシアン・フロイド自身、
ペイコン作品の画題にも登場する。
『流失』ゲルマン神話のヒロインにしてジークフリートの相
手役であるブリュンヒルデ。アンゼルム・キーファアはたび
たびブリュンヒルデを画題にしている。

不毛の神

二条千河

かつて我らは其処に棲んだ、
君が今居るその場所に
当時はまだ石ころだらけの荒れ野原
やがて我が立ち去つたあとに
区画され、耕され、潤され
初めて実りをもたらす土壌となつた
彼処に棲んだこともある、
咲く花とてなき泥沼の
踏み入るものは何でも呑み込む湿地帯
やがて我が立ち去つたあとに
珍しい鳥や虫たちが脚光を浴び
急ごしらえの木道に見物客が詰めかけた
地球上の至る処
我らの楽園だつた時代もある、
無数の命がただ生きて死んでいくだけの
果てなきデッドスペース
それでも豊穣の神は強気だつた
金の生る木はどんな土地にも根付くものだと
例えは此処、乾きつた砂岩の丘も
メガソーラーの建設地には申し分ないそうだ
まもなく我が立ち去つたあとに
不動産屋は高い値を付けるだろう
そう、もはやこの星に
不毛の地など何処にもないのだ。

étude 四肆舞 71/88

池田 康

聞こえる
足元に奔を入れる音
樵が倒そうとしている
百年こうして静かに立つている私を
聞こえる
傷を深くより深く刻む
私の生命を途絶えさせようとする
鉄の刃の音
倒れる
しかし倒れてもなお立っている
この森の一員
しかし森から出ていく気はない
聞こえる
樵がひきすつていく音
しかし私は出ていかない
彼はなにをもつていこうとしているのだろう
(88)
淋しい遊びに揺れる 男か女か
童の影
どこへも行かない乗り物に乗る
どこへも行かない孤独
ブランコが高くなるとき
誰でもない声かして
地の涯が到来する
虚空が脈打つ
心を遠心分離機にかけ
うつつの襤褸を振り落とし
心の核の童を連れ
天へと登る機械
青を支点に
長い長い連鎖の涯に揺ればば
どこへも行ける
童の芯の風

